

島井稻三

津上田村

忠宗利晃

夫雄徳功

編

小菴和歌集

三 稻井 島
村 田上 津
晃 利宗 忠
功 德雄 夫
編

小治政集

古典文庫第三〇三冊

昭和四十七年八月十日印刷発行

© 非売品

六花和歌集

編者

三村晃功
井田利雄
島上宗夫

発行者
吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者
帝都印刷製本株式会社

発行所

114 東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

凡 例

一、私撰和歌集『六華和歌集』の伝本は、現在知られるところでは島原松平文庫所蔵の一本だけであり、本書はそれを底本にして、忠実に翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等すべて底本のままとしたが、漢字は原則として現行活字に改めた。

2 底本の誤脱、誤字などはそのままとし、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）と傍注した。

3 底本の欠字の個所はその字数分だけあけ、「みせけち」「補入」等はそのままとした。ただし、「みせけち」のものと字で書き誤りと思われるものや、不明な字体については、「□」で表わした所がある。また判読に問題ある字の左傍に・を打って注記した所もある。私注はすべて（ ）に入れ

て記した。

4 便宜上各歌に一連番号を付し、初句索引及び作者・出典一覧の検索に便ならしめた。ただし、一一二〇番の次は出典名と作者名のみ記し、和歌を欠落しているので、一連番号は付さなかった。

三、本書は、さきに編者の内の井上・島津が、『雲玉和歌抄』を翻刻した際、その序に「近曾万葉由阿みとて詞林採要をかき六花をあつめて……」とある「六花」を蓬左文庫・島原松平文庫・彰考館等に蔵する『六花集注』であると考え、その翻刻を予定していたが、その『六花集注』は、本書の中から難解と思われる和歌を抄出し、それに注解を付したものであることに気づき、『六花集注』の翻刻に先立って、先ず本書を翻刻しておこうとするものである。

四、本書所収歌の出典一覧・索引および解題は、続刊の『六花集注』に附載するので、ここには簡単に書誌的説明を加えておく。本書は、肥前島原松平文庫の所蔵にかかる、寛文・元禄期頃の書写になる、大本七卷二冊の写本。函架番号一三二一八、上・下冊とも巻末に「尚舎源忠房」「文庫」の印記を有する。題簽

は「六華和歌集上（下）」、内題は「六華和謠集第一（二・四・七）」・「六華和謠集第五（六）」で、墨付上卷九四丁、下卷九八丁、遊紙は上下巻とも前後に各一丁ずつ有する。奥書の類はない。書式は、和歌を一行書きにし、その和歌の前に出典名（欠く場合もある）をだいたい二・三字下げ、作者名を一二・一四字下げで記す。一面一〇行書きである。内容は、春（第一巻）・夏（第二巻）・秋（第三巻）・冬（第四巻）・恋（第五巻）・羈旅（第五巻）・雑上（第六巻）・雑下（第七巻）・神祇（第七巻）・釈教（第七巻）の部立のもとに、一九三四首を載せる私撰集であるが、冬部と羈旅の部に錯簡が認められる。すなわち、本書と前記『六花集注』との比較・検討の結果、冬部における二〇四三番（和歌は本文によつてもらいたい）から三三三番の和歌に至る個所と、羈旅部における二六六番から二六三番の和歌に至る個所にそれが指摘される。このうち、冬部における二〇四三番から二四七番に至る和歌は恋部、二四八番から三〇四番に至る和歌は春部、三〇五番から三三三番までの和歌は夏部、三三三番から三三三番に至る和歌は秋部、羈旅部における前記の個所の和歌は恋部に所属するものである。従つて、冬部

の錯簡個所の直前の二〇四番の和歌は、正しくは三三七番の和歌へ続くという体である。そして、右の錯簡個所の恋部の和歌は、一五四番の和歌の次に、二〇三番から二〇七番に至る和歌を置き、その直後に二〇八番から二一三番に至る和歌を置いて、一五三番の和歌につながぐという操作で、恋部の配列は正常となるが、春部・夏部・秋部の錯簡個所の和歌は、雑上部の和歌がきわめて少数である関係から、あるいはその雑上部に配列されていたのかも知れないと推測されるけれども判然とせず、この部分の正常位置は不詳としか言いようがない。また四四番と二三番、五三番と二三〇番、五九番と二八八番、五四番と六三三番、六八番と二四二番、六七番と二五三番、六七番と二五二番、六三番と二五七番、七四番と二八六番、九三番と二五六番、九六番と二五七番、一三八七番と二八四番、一三九七番と二五八番、一五三番と二七〇番の和歌は重出歌である。なお新拾遺集あたりの歌が最も新しく、成立はおよそ南北朝後期と思われるが、詳しくは解題に述べる。

五、本書は、三村晃功・稻田利徳・井上宗雄・島津忠夫の共同作業になる。出典調査、錯簡の指摘等を初め、中心業務はもっぱら三村が当り、翻刻原稿の素稿

は稲田が作り、それらに基づき四名で相互に検討を加えた。

六、本書の成るに際しては、翻刻の御許可を賜わった島原公民館、資料の面でお世話になった橋本不美男氏、出典調査でご協力いただいた福田秀一氏、本書の刊行を快諾してくださった吉田幸一氏に、深く感謝の意を表する次第である。

昭和四十七年二月

三	村	晃	功
稲	田	利	徳
井	上	宗	雄
島	津	忠	夫

六華和歌集
上

(上冊題簽)

六華和歌集卷第一

春 哥

後京極

一 冬の夢の驚か。れ欺ぬる明ほのに春のうつゝのまつ見ゆる哉

権中納言定家

二 春くれは星のくらるに影みえて雲井の庭にいつる婦人

從三位家隆

三 もろ人の立ぬる庭のさかつきにひかりもしるし千代の初春

後京極

四 をしなへて今日は霞のしき嶋や大和もろ人春を知らむ

西行上人

五 とけそむる初若水のこほりまで春たつことのくまれぬる哉

続後

後嵯峨院

六 しきしまや大和しまねの朝霞もろこしまても春は立らし

中納言為相

七 いつのまにかすめる空と成ぬらん昨日は雪のふるとしの雲

新古

宮内卿

八 かきくらし猶古郷の雪の内に跡こそ見えね春は来にけり

続古

中務卿親王

九 大伴のみ津のはま松かすむなりはや日のもとに春や立らむ

万廿

大伴家持

一〇 水鳥の鴨のは色の白馬を今日見る人はかきりなしやといふ

伊勢大輔

一一 卯杖つきつまゝほしきはたまさかに君かとふ火の若菜成けり

古今

読人不知

三 春日野のとふ火の野守いてゝみよいまいくか有て若菜摘てん

新千

郁芳門院

三 ふめはをしかた野の若菜雪ふかみ雉の跡を尋てそつむ

万廿

葛城王

一四 あかねさすひるは田たひてぬは玉の夜のいとまにつめるせりかな

玉吟

家隆

一五 若菜つむ袖に折もつ梅か枝を花のかたみと人や見るらん

風雅

大納言為定

一六 若菜摘いく里人の跡ならむ雪間あまたに野は成にけり

山家

西行上人

一七 礮菜つむあまのさ郎女心せよ興ふく風に波たかく見ゆ

俊頼

一八 ひきなかす手束の弓の矢てはやみ鞆音に的のなりかはす哉

六百番

撰政太政大臣

一九 今日。我君かみまへにとる文のさしてかたよるあつき弓かな
判者奏文杖にさすなり

新千

鷹司院

二〇 立わたる春の霞やさほ姫の遠山すりの衣なるらむ

西園寺入道前大政大臣
(マ、)

二一 夜をこめて霞待とる山の端に横雲しらて明る空かな

後嵯峨院

二二 谷ふかみ日影にのこる白雪やたつをたまきの花と見ゆらん

万廿

順徳院

二三 風吹は嶺のときは木露落て空より消る春のあは雪

新古

式子内親王

二四 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえくかゝる雪の玉水

続古

光明峯入道前大政大臣
(マ、)(マ、)

二五 音羽河滝の水上雪消てあさ日にいつる水のしら波

順徳院

二六 ちくま川春行水はすみにけり消ていくかの岑のしら雲

西行

二七 降つみし高根のみ雪とけにけり清たき河の水の白浪

中納言為相

二八 御吉野の滝の白糸春くれはあはにとけ行薄氷かな

曾禰好忠

二九 香久山の滝のこほりもとけなくに吉野のたけは雪消にけり

野宮左大臣

三〇 日影見ぬ太山かくれになかれ来て雪消の水の氷ぬる哉

家隆

三一 雪消て後さへたとる山路かな霞にのこる春の下おれ

後京極

三二 朝日さすこほりの上のうす煙またはれやらぬよとの川きし

新古

宮内卿

三 うすくこき野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪の村消

後京極

三 霜かれの春の萩原^{ヲキ}うちそよきすそ野に残る去年の秋風

藤原能清

三 梅の花それとみえねとをる袖のぬるゝや雪のしるし成らん

仙洞百首

家隆

三 梅か枝に妻よひき鳴鶯のなみたやそむる花の朝露

万代

鎌倉右大臣

三 打なひき春さりくれは楸おふるかた山陰に鶯のなく

古

三 鶯の笠にぬふてふ梅の花折てかさゝむ老かくるやと

後

三 春雨のふらは野山にましりなむ梅の花かさありと云なり